

生き切る

壺坂 艶子

三鷹の森ジブリの近く杏林大学病院の第三病棟九階で暮れなずむ街の灯りを眺めながら私の今まで生きて来た人生、何だったのか考えています。

一昨年大腸ガンの手術を受け、昨年には甲状腺ガンの予告。ところが手術の予定が三十年来の病気糖尿病でH A 1 C（ヘモグロビンエーワンシー）が七・八もありこの年でこの数値で手術をすると死につながる何があってもおかしくないと言われ、杏林大学病院の医師をして三男に言われました。

今まで年の事など考えた事もなかったので驚き、やはり年は年かと反省し、それ以来八王子市のゴミ焼却炉の余熱利用のプールで一週間に四、五回、三十分で千百疋（二十五疋プールを四十四本）泳ぎやっとならぬとH A 1 Cを五・八まで下げて現在無事に手術が終了しました。

南に中央ハイウェイのあかり、この空の下街の灯りのもとそれぞれの人生を送っている人々何だか、いとおしく思えます。そして七十九年近くも生きて来た私の人生、道に迷った時もありましたが、楽しみもあり悲しみもありました。

ただ一生懸命で無我夢中に生きただけで生き切ったと言えるかどうか考えています。

年をとると云う事がどういうものなのか、その昔土佐中・高でお世話になった久保田伸雄先生が“おまさん、御主人の会社をチツクト手伝うよりヨ、出しゃばったらイカンぜよ”と言ってくださった言葉、チツクト手伝っているつもりが気がついたら銀行を始め税務署、法人会の女性部会、地域の役員、親会の社会貢献委員まで、技術畑一筋で地域とは一切つき合いない主人の代わりに私が出しゃばり、家内をやる予定がオットさんをやって四十四年つくづくよくやって来たなあと思います。

いろいろな事、反省しながらもあと残りの人生 何事があるかわかりませんが、宿命のある限り有意義に生き切って行こうと考えています。